The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	吉田先生と素読
Author(s)	今川, せい; 今川, ふさ
Citation	懐徳. 1979, 49, p. 50-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90578
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

吉田先生と素読

素読科規則

一、素読科ハ孝経四書全部ヲ課シ一箇年ヲ以テ修了スルモノトス

一、素読生ハ満十二年以上十八年以下ノモノニ限ル

一、素読生タラントスル者ハ父兄又ハ後見人連署ノ志望書ヲ差出スヘシ（用紙ハ本堂之ヲ交附ス）

一、素読科ハ毎週月、木、土曜日ノ三回午後一時ヨリ同六時マデノ間ニ於テ来堂順ニ之ヲ授ク

一、素読生ハ授業料ヲ徴収セズ

一、素読科終了者ニハ修業証書ヲ授与ス

これは、懐徳堂で大正六年五月から開始された素読科の規則である。当初、波多野七蔵先生が教師に当られたが、同九年東京に去られたので、吉田先生が、その後を継いで癈止までに二十余年続いた。

吉田先生は、幼少の頃、天満に在住され、当時、松ヶ町にあった市村盈缶先生の塾に通われたそうで、今日、字突棒を手にして、素読生に対していると、往時を憶い起して感慨に堪えないと述懐されたことがあった。

当時の素読生は、中学生が多かったが、男女共、行儀作法も正しく、当今とは随分差がある。又一家から兄妹揃うて通われる方も珍らしくなかった。

その頃、兄妹四人、素読生から、聴講生と継続多年に亘られた一家の今川せい・ふさの御姉妹が、今猶天理市に健在されているのを知り、此程、請うて、六十年近い往時の追懐を寄稿して戴いた。次に掲げる二篇が夫れである。（中川幸三）

素読の思い出

今川せい

素読に就いて、何か思い出を書けとの仰せでございますが、何分筆と口とが最も苦手な私でございます。今

日迄、長い歳月の間に、そういう機会に万一、出あいましても、うまく、遁れて通って参りましたような次第でございますが、再三の仰せ、何の御答えも申し上げないのは、余りに、失礼と存じますので、申訳けに、数行連ねさして頂きます。悪文乱筆、御判読下さいませ。記憶の間違いは、御訂正下さいますよう、お願い申し上げます。

私が始めて、懐徳堂に御厄介になりましたのは、大正九年かと存じます。弟に案内されて、一緒に拝聴いたしました。それは、恰度、定日講義の日で、松山先生の書経、次の時間は、西村先生の孟子の講義でございました。漢文というものに、初めて接した私は、何となく、続けて拝聴したい気持になり、講義の日には、家庭の雑用の忙しい中を、いろいろ段取をつけて、時間限り限り、走って通ったものでございます。

そのうち、定日講義ばかりではなく、日曜朝講、定期講演なども、聴講さして頂きました。

或時、先生から、経学歴史一冊、これを読めと、おすすめ頂きました。白文なので、初心の私は、人名を知らずに、名詞や動詞に読んだりしますから、中々、意味が通ぜず、訓みが下りません。四苦八苦のところを、吉田先生が、訓み方を教えてやると仰せ下さいましたので、喜んで教えて頂きに参りました。

吉田先生は、素読をお受持になり、孝経、四書、五経を、若い学生、生徒達に教えておられましたが、その合間に教えて下さいました。やっと、一冊どうにか、読み畢えさせて頂きました。

大正十二年、吉田先生は、中国へ留学されることになり、北京へ御出立になりました。処が、吉田先生の御帰朝まで、私に素読の授業をやるようにとの御命を受けました。私は人様にお教えするような柄ではございませんので、再三、御辞退申し上げましたが、強っての仰せ、もともと、何も知らぬところから、人一倍、お世話をかけて来たこの私、何なりと、御手伝さして頂かねば申訳ないと思い、難しい処は、松山先生が、いつも、お二階にお出でになるから、お伺いすれば、教えて頂けることでございますから、お言葉に従い、お受けさして頂きました。

さて、素読の日、その時間までに行って、小講堂で待って居りました。ところが誰も見えません。日を間違えたのかと思いましたが、確かに、素読の日です。今か今かと待ちましたが、終に、其の日は、誰も見えませんでした。次の日は如何、同様です。又その次の日はと。こんな時、一人でも見えたら、大歓迎でございます。僅か

に、女の生徒さんが来て下さいましたが、今まで見えて居った中学生位の男の生徒は、一人も見えなくなりました。

頼りなく思われるのは、当然のことでございますが、それにしても、これでは、素読を継続する形にはなりません。懐徳堂に対し、又、今日迄お骨折り下された先生に対し、誠に申訳けなき次第でございます。私は、自責の念にかられ、心苦しく、身を削られるような思いの日々を重ねて参りました。

考えて見れば、御命をお受けしたのは、さる事乍ら、学徳共に拙い自分が、それは、重々承知しているつもりではございましたが、勿論、今日までの先生の時と同じような訳には参らぬことも承知しては居りましたけれども、それにしても、何とか続けさして頂けるものと、うっかり、過信して居りましたのが、大変、傲った心であったということに、気がつきました。この状態が、私の本当の姿でございます。徳の拙い自分の姿を、まざまざと見せて頂き、深く反省、真に自覚することが出来ました。この事は、自分に取って大きな幸であり、収獲でございました。幾ら努力しても、赤坊が、一遍に、大人になることは出来ません。日々の研鑽、倦まざる努力を重ねてこそ、だんだんと、成人して行くものでございましょう。

こういう風に気がつきますと、今までの憂鬱な心、あせりの心は消え失せて、心の底に、喜びと勇み心が湧いて来て、心に明るさがさして来ました。

お蔭で、こういうような心境で、実状は、細々ながら続けて、先生の御帰朝をお待ち申上げました。

吉田先生には、中国に於ける研究を重ねられ、無事、御帰朝になりました。その御研究の一として、中国語を研究してお帰りになりましたが、早速、「大学」を教えてやろうと仰しゃいました。何でも、教えて頂くのは、有り難いことでございます。

「大学之道（タイガクノミチヲ）」と一字一字、発音と四声を覚えなければなりません。一字の発音が、中々、容易ならんことで、それを、一行二行と、僅か一行二行でも、初めの者には、大変でございます。これには、恐入りました。けれども、最初から、挫折したのでは話になりません。何とか、続けなければと頑張りました。やっとのことで、「大学」を読んだとも申せませんが、終まで辿りつきました。これも、素読と言えば素読でございましょう。

後、天理外国語学校が創設されましたので、その中国語科に入学、北京語を修得し、昭和五年卒業、其年、渡華、北京に於て、対華人伝道に従事し、終戦後、二十三

年度帰国命令で、已むなく帰国させられましたが、時々、「大学之道」を思い出しては、先生の御熱心に感謝し、自分の魯鈍に苦笑して居りましたが、今は、懐かしい思い出でございます。

素読の思い出

今川ふさ

私が小学校四年生頃の事だったと思います。姉が夕食の後始末をせっせと了えて、いそいそと風呂敷包をかかえて出て行く日が一週間に何回かありました。はじめの中は気にも止めませんでしたが、一体どこへ行くのかと思って居りましたところ、懐徳堂という所へ漢文の聴講に行くのだとのこと。そこは家からあまり遠くない本町橋の北の方に在りました。私も行きたいな、然しむつかしいだろうなと思って居りましたら、或る日姉が言うに、素読といって読むのだけを教えて下され年は満十才から行けるとの事故貴女も来年の四月になったら教えて頂きに行ってはどうかと言ってくれましたので早く十一にならないかと指折り数えて十一の春を待ちました。それは大正十年のことであったと思います。凡そ六十年も昔の事ですから、記憶もあまり確かではありませんが……。四月からと思って居ったのが、二月生れだから少しおまけして、年が明けたら正月から来てもよい、とお許を頂きましたので、十年の一月から姉に連れられて、懐徳堂へ通い始めました。

威圧されるような古い大きい建物で、一種特別な本の匂いが漂っています。大きい講堂の横に小講堂がありまして、その小講堂で素読を教えて頂きました。小講堂には大きい机が二列程並べてあって、先生は一番前列の机にこちらを向いて坐ってお出でになる。生徒は先着順に一人ずつ先生の前に坐って、教えて頂く。いよいよ私の番が来ました。恐る恐る先生の御前に坐りました。眼鏡の奥からギョロリと光った鋭い眼でこちらを見てお出でになる。お名前は吉田鋭雄先生と申し上げます。

用意して行った孝経を開けると、一尺余りもある長い字つきで、一字ずつ押えて、声をあげて丁寧に読んで下さいます。一句読み了られると、次は私がその通りに読む。一対一で先生の御前に坐っただけでも戦えているのですから、なかなか声を張り上げることは出来ません。無事に読み了えたら、今度は先生が次の句をお読みになり、このようにして一節を読み了えたら、もう一回初め

から繰り返して読んで下さる。その次は一人で読みなさいと仰しゃったので一寸びっくり。冬の寒い時でしたが「帰って宜しい」と仰しゃって頂いた時には、顔も身体もほてって、長い緊張から解放された思いでした。このようにして、一週間に確か、火木土であったか、三回通いました。時間は午後二時から、五時（？）までであったかと思いますが、こちらの都合のよい時間に行けば宜しい。学校から帰って、本と鉛筆を風呂敷に包んで小走りに懐徳堂へ着く時間は大体決っていました。その中いつも会う二三人の生徒さんにも顔なじみにはなりましたが、勿論話はしたことがない。何というお名前かも存じませんでしたが、皆私より年上の方ばかりでした。又素読生が全体で何人位あるのか、それも知る由もなく、又知りたいとも思いませんでした。一人一人が先生対生徒でありますから、生徒同志の連絡は無かったように思います。少くとも私は、誰方にも連絡を持ちませんでした。

或時、私の前に居られた男の方を見て非常に異様に感じました。その方は「厚司（あつし）」を着て上に袴を穿いて居られる。自分の眼を擦ってよく見ましたが、その後何回か会いましてもいつもこの服装でした。それで私は心ひそかに「あつし袴さん」の尊称を捧げて居りました。或る時、私の行くのが少し遅れた時の事、その方はもう素読を終えて帰ろうとして、講堂の入口の外で、袴を脱いで居られるのに、ばったり出会いました。私は子供心に「ハハン。成る程」と思いました。忙しい商売の寸暇を割いて漢文の勉強に来て居られる。着更えの暇もなく、あつしのままで袴だけを包んで走って来て、講堂の外で袴を着け、威儀を正して教を受けられるのだなあと感心しました。その印象は今でも尚はっきりして居ます。ここに大阪の文化があるのだと思えました。大阪の街の真中に古い堂があって、その中で大阪の人は自分の仕事の余暇に漢籍の研究を楽しんでいる。ほんとうに誇らしく思いました。話が横に外れましたが、何しろ年少な私は訳が分からず読むものですから、どうしても覚えられぬ字が出て来ます。今思っても、吹き出したくなることは「寧ろ」が中々覚えられない。そういう時には何かに関連して覚えることにします。それで「むしろ」を敷物と覚えておきましたところが、先生の御前でこの字を、不図「ゴザ」と読みました。先生は「えっ」と仰しゃって聞き返されましたが、「しまった」と思っても中々むしろが出て来ない。先生はお気付きになったのかどうか、笑いもなさらず「むしろ」と教えて下さいました。何しろ此の程度の力で読むのですから、先生もどれだけお骨

が折れられた事かと、今申訳なく思っている次第でございます。此の種の失敗が度々あったことは申すまでもございません。

吉田先生が御用か何かでお休みになった時には、お二階の松山先生のお部屋へ行って教わりました。この時は吉田先生以上に、コチコチになってしまいます。かてて加えて、松山先生と吉田先生とは読み方が少々異います。松山先生は「子のたまわく」吉田先生は「子いわく」それを日頃のくせで「子いわく」と読めば、立ち所に「子のたまわく」と訂正されました。それから、吉田先生は送りかなを出来るだけ省いてお読みになりましたが、松山先生は、そうではありません。この様な、一寸した異いが、年少の私には融通がききませんでした。

それから、素読をして居って嬉しかった事を一つ。

大正十一年十月、懐徳堂で孔子歿後二千四百年記念祭の釈典が行なわれました。そのお祭祀が済んで何と仰しゃる先生でしたか講演がありまして、その時始めて漢文というものの講義を聴かせて頂きました。漢文というものはその読み方で意味がいろいろに取れるのだということを知りました。

釈典も講演も終って退場の時、西村天囚先生がつかつかと私の前へ寄って来られました。松山先生も勿論御一緒でした。松山先生が、素読をして居る者です、と紹介して下さいましたら、西村先生は「今何を習って居るか」とのお尋ねに「孟子を教えて頂いて居ります」とお答え申し上げましたら、小さいのによく続いてやって居るという意味の事を仰しゃってお褒め下され、先生の大きなお手で、私の頭を撫でて下さいました。その感触は今も尚、仮令黒が白に変わりましても残って居ります。

もう一つ、私が気をよくした事は、高等女学校一年生の時でしたか（大正十三年四月に二年に進級）授業を受けて居りましたら、外でけたたましく号外の鈴の音が聞こえて来ました。又何かあったのかと思って居りましたら、次の国語の時間に先生から、国民精神作興に関する御詔書が発布せられたことを承りました。そして、その号外を皆に配られて、今日はこれを皆と一緒に読みましょう、と仰っしゃいました。中に何字か、平生余りお眼に懸らない字が出て来ました。先生はその都度、読める人、手を挙げなさいと仰しゃったので、次々と手を挙げて読みましたら、宜しいと仰っしゃいました。帰りに停留所で電車を待って居りますと偶然その先生もそこへ近よって来られました。多少緊張を感じて立って居ましたら、先生は、「今日はどうしたのですか、実は私は授業に出る前に急いで字引で読み方をしらべて行ったのに、あなたは何故

あの難かしい字を間違いなく次々と読んだのですか」とお尋ねになりました。「私は只今懐徳堂で素読を教えて頂いて居ります」と申し上げましたら「今何を読んで居ますか。今迄何を読みましたか」「孝経・四書を卒えまして、只今は五経の中の書経を教えて頂いて居ります。幸い最近に教えて頂いた字ばかりでございましたので」と申し上げました。先生は一寸驚かれたような御様子でしたが、「それはよい事です。続けて勉強しなさい」と、励ましのお言葉を頂きました。実はその頃已に高等女学校へ通って居りましたので、学校も遠くなり、学課の方もだんだん忙がしくなり、時間もありませんので、まさに挫折しようとしかけて居りました折柄、この事に励まされまして、曲りなりに五経を卒えさせて頂くことが出来ました。百事人下に出ずる私、人にほめて頂くような事は更々覚えがありません。これは折角始めかけた事を達成させてやろうとの、天の深い親心と感謝いたして居ります。又、この先生は正直に、字引で調べて来たと仰しゃいましたが偉い先生だと思いました。今も左様に思って居ります。

かように、おほめ頂いたことは覚えて居りましても、四書五経の読み方など、殆んどお返えしして仕舞ったような有様で、誠に先生のお骨折りに対し申訳なきことと慚愧に堪えぬ次第でございます。